

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K12613

研究課題名(和文) 地域防災・減災のための「やさしい日本語」の教育と普及に関する研究

研究課題名(英文) A study on a method of using plain Japanese for non-native speakers of Japanese

研究代表者

轟木 靖子 (Todoroki, Yasuko)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：30271084

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、外国人住民の防災を考えるうえで重要な「やさしい日本語」の、一般の日本人への普及および教育を実施するうえで有効な方策について、アンケート調査等の結果等から分析・考察をおこなうものである。日本語教育の専門家や外国人支援ボランティア以外の一般の日本人にできるだけ「やさしい日本語」を知ってもらい、活用を促すことで、地域の防災や減災をより充実させることを目的とする。一般向けの講習会、日本人学生への指導および学習成果の分析・評価、日本人との間で防災に関する知識や意識がどのように異なるかの調査・分析等を中心におこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本人住民・学生と外国人住民・留学生に実施した防災に関するアンケート調査(回答数約100名)から、防災に対する備えとして多くの日本人が知っている「家具の固定」「すぐに外へ逃げ出さないこと」が外国人には理解されにくいことが明らかになった。また、母国で地震を体験したことがない外国人が非常に多いこと、そのため日本語が比較的上手な学習者でも不安が大きいことが明らかになった。また、日本人が「やさしい日本語」を使ううえでは、日本語をやさしくするテクニックだけでなく、情報を選別し、不要なものを削除する判断能力が重要であることが再確認された。

研究成果の概要(英文)：This study investigates the skills necessary for Japanese people when using 'plain Japanese' with non-native speakers of Japanese. When natural disasters, such as major earthquakes or floods occur, 'plain Japanese', yasashii Nihongo, can be used to give non-native speakers of Japanese instructions on how to escape from the damage caused by such disasters. In order to reduce the damage in disaster areas, it is necessary for all Japanese people, not only teachers of Japanese language for foreigners, to be able to use plain Japanese. From the results of questionnaire survey, it was found that it is easy to reduce the number of kanji characters and use a furigana script to show their pronunciation. However, it proved difficult to determine which information was essential or not, or that which could be discarded. The results also revealed that non-native speakers of Japanese were not familiar with countermeasures for earthquakes in daily life, such as in securing furniture to walls.

研究分野：言語学

キーワード：やさしい日本語 防災 外国人住民

1. 研究開始当初の背景

近年、在留外国人が増加する中、日本語がじゅうぶんでない外国人住民との情報伝達に欠かせないものとして「やさしい日本語」が使われることがある。これは、1995年の阪神淡路大震災で多くの外国人が情報弱者となり、それがきっかけとなり注目されるようになったものである。「やさしい日本語」は、必要な情報に優先順位をつけ、短い、構造の単純な文を用いる、難しい語彙を避ける、漢字にルビをふる、分かち書きをする等いくつかのスキルが求められる。

現在のところ、「やさしい日本語」は、国際交流や外国人住民支援に関わる機関・団体およびそのボランティアにまかされていることが多い。しかし、地域全体の災害時の対策を考えるのであれば、地域住民が躊躇なく「やさしい日本語」が使えるようになることが望ましい。地域の防災・減災は自力避難困難者に外国人住民も含めて対策を取ることの必要性を地域住民が認識することが重要であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、より多くの日本人住民が「やさしい日本語」が使えるようになり、地域の防災・減災につながる活動ができるようになることを目的とする。そのために、外国人住民の、地震を主とした自然災害および防災に関する意識や、日本語母語話者が「やさしい日本語」を使って文を作る場合の課題を明らかにする。

地震等の防災対策を考えるうえで、とくに外国人住民にとって認識されにくいこと、および多くの日本人が「やさしい日本語」が使えるようになるために抑えておくポイントを明らかにすることは、「やさしい日本語」を使った防災対策をすすめるうえで重要であると考えられる。

3. 研究の方法

(1)外国人住民の防災意識等に関する調査

日本で生活する外国人住民の防災意識を明らかにするため、主として愛媛県および香川県で生活している留学生や社会人等にアンケート調査をおこなった。比較対象のため日本人学生にも同様のアンケートを実施した。調査時期は1回目調査は2017年(一部2016年)および2018年、追加の2回目調査を2020年から2021年に実施した。回答者数は1回目調査は外国人192名日本人51名、2回目調査は外国人43名日本人52名である。調査は1回目調査は質問紙を配布し回収、2回目調査は主としてオンラインによるアンケートへの入力であった。外国人に対する調査はやさしい日本語を使ったものおよび英語版を用意した。1回目調査についてはインドネシア語、マレーシア語によるものも用意し実施した。

(2)日本人の「やさしい日本語」に関する調査

日本人が「やさしい日本語」を使って情報伝達をおこなう場合の留意点を明らかにするため、防災チラシの書き換えのタスクを実施した。防災チラシは地域の自治体から各家庭に配布されたものの中から、家具の固定やガラスの飛散防止、玄関周りの整頓等について書かれた部分を利用した。調査対象者は20名で、やさしい日本語について学んだ経験のある6名を含んでいる。もとの防災チラシはA4サイズ1枚だが、そのうち上半分が家具の固定の金具の説明であり、下半分がさらにガラスの飛散防止と玄関周りの整頓の説明の二つに分かれている。それぞれイラスト入りで丁寧に書かれているが、家具の固定金具の説明が全体の二分の一を占めるというアンバランスさをどのように解消するかがポイントとなった。

4. 研究成果

(1) 外国人住民の防災意識等について

アンケート調査の結果から、以下のことが明らかになった。

- ・「地震」「津波」という語は知られているが、自分の国では地震も津波も経験がないという回答者が多かった。
- ・地震が起きたときにどうするか、ということに関して（頭ではわかっている）外へ逃げるといった行動が結びつきやすく、家の中でなにかよくわからない状況でじっとしているのは難しいという回答も多くみられた。
- ・普段からの備えとして、食料や水の備蓄については考えが及ぶが、家具の固定や避難経路の確認は意識にのぼりにくいようである。

(2)日本人による「やさしい日本語」の活用について

- ・漢字の使用量を少なくしたり、漢字にルビをふるのは比較的対応しやすい。
- ・やさしい=ひらがな と考えやすく、中国や台湾の出身者には漢字があることでわかりやすくなる、という点に気付きにくい。
- ・丁寧に言おうとすると語尾が長くなるという点はわかりにくく、わかったとしてもすぐには修正しにくい。
- ・どの情報が重要でどの情報を切り捨ててもよいかという判断が難しい。

新型コロナウイルス感染症の流行にともない、当初予定していたシンポジウム等の開催は見送らざるをえなかったが、オンラインを利用した調査や学内での少人数での活動等により一定の成果をあげることができた。今回研究成果を受け今後も「やさしい日本語」の普及につとめたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 轟木靖子・高橋志野・山下直子	4. 巻 23
2. 論文標題 日本人学生と留学生の防災に対する意識について - アンケート調査の分析 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 香川大学生涯学習教育研究センター研究報告	6. 最初と最後の頁 75-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 轟木靖子・山下直子	4. 巻 25号
2. 論文標題 防災・減災のための「やさしい日本語」- チラシ作成タスクの分析から -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 香川大学地域連携・生涯学習センター研究報告	6. 最初と最後の頁 33-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 轟木靖子・山下直子	4. 巻 第5号
2. 論文標題 「やさしい日本語」を使った防災チラシの作成について - 日本人学生の行動の分析 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 香川大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 69-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 轟木靖子・高橋志野・山下直子	4. 巻 第27号
2. 論文標題 地域の防災における外国人支援について - 地震に対する備えを中心に -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 香川大学地域連携・生涯学習センター研究報告	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 轟木靖子・山下直子
2. 発表標題 外国人住民の防災について考える - 地域・学校との連携を中心に -
3. 学会等名 日本語教育学会2017年度四国支部集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 轟木靖子・山下直子
2. 発表標題 多文化共生社会の防災について
3. 学会等名 日本語教育学会2019年度四国支部集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 轟木靖子・山下直子
2. 発表標題 日本語母語話者にとっての「やさしい日本語」 - ストーリー・テリングによる調査の分析 -
3. 学会等名 日本語日本文化教育研究会第34回研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 轟木靖子・山下直子
2. 発表標題 総合的学習の時間における地域防災教育の試み - 多文化共生の視点から -
3. 学会等名 2018年度比較文化学会関西・中国四国・九州三支部合同研究集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

山下直子・平田史織 「やさしい日本語」を使った地震クイズの作成，平成29年度さぬき市国際交流事業 2017年7月2日開催
山下直子 災害時におけるやさしい日本語研修 愛媛県四国中央市役所 2019年1月24日
山下直子 学部教育プロジェクト「香大発多文化共生プロジェクト」やさしい日本語講習会，香川大学経済学部 2021年8月4日
地域防災・減災のための「やさしい日本語」の普及と教育に関する研究 研究成果中間報告書(課題番号17K2613) 2019年3月
防災とやさしい日本語2 研究成果報告書 (課題番号17K2613) 2022年3月

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山下 直子 (Yamashita Naoko) (30314892)	香川大学・教育学部・教授 (16201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------